第 27 号　2012 年 6 月 16 日

カトリック仙台司教区・ カリタスジャパン
東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫　編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

今回の紙面は、盛りだくさんです。先ず、CTVC（カトリック東京ボランティアセンター）の原町ベース開設！そして、その福島の支援グループによるブロック会議。さらに6月11～13日に行われた全国担当者会議の模様など熱い、篤い思いがたっぷり詰まっています。

待ちに待った！　福島が待っていた！

幸田司教、平賀司教、当地の社協所長によるテープカット！

CTVC（カトリック東京ボランティアセンター）運営の「カリタス原町ベース」が、東日本大震災の復興支援のための 8 つ目のベースとして、2012 年 6 月 1 日、福島県南相馬市原町区に誕生しました。当日は仙台教区から平賀徹夫司教をはじめ、東京教区幸田司教、教会関係者、各地のベースリーダーなど、多数のオールジャパン復興支援関係の方にご参加いただきました。また南相馬市からは南相馬市鹿島区社協所長、仮設での活動に参加させていただいている NPO の方、復興支援関係者、NGO 団体からもご参加をいただき、総勢 70 名での開所式となりました。

福島の悲しみ、悩みと寄り添うことを語る幸田司教！

CTVC では、2011 年 7 月よりカトリック原町教会と祈りや交流を通してつながりを深めてきました。2011 年 9 月 30 日の緊急時避難準備区域の解除により、南相馬市鹿島区、原町区には多くの仮設住宅が建てられ、同市の津波被害により避難された方、小高区の原発被害により避難された方が入居されました。それを受け、仮設住宅の集会所でカフェサロンを行っている地元 NPO「やっぺ南相馬」の活動に参加させていただくという形で CTVC も仮設住宅での活動を開始、現在もボランティアを派遣するなど活動を継続中です。2012 年 4 月 16 日には、警戒区域の再編が行われ、南相馬市小高区が避難指示解除準備区域に移行されると、5 月 18 日には南相馬市鹿島区社協によりボランティアの募集が開始されました。

今後のベース歩みに神さまの恵みを願いつつ！

今後当ベースは、仮設住宅のカフェサロンへのボランティア派遣や社協のボランティア派遣のためのベースとして、また独自の活動の拠点、福島の現状を発信する場として、幅広い活動を行っていく予定です。

CTVC　辻　明美

第３回福島ブロック会議 in 原町

日頃の活動の分かち合い！

震災後、福島県内で支援活動を行っている各グループが集まり、6 月 4 日、原町ベースで第 3 回福島ブロック会議が開催されました。

これは CTVC の主催で、前回の参加団体は聖公会東京 311 ボランティアチーム、きらきら星ネット、「もみの木」ベースの 3 グループ。以上のグループに、今回、二本松カトリック教会の「福島やさい畑～復興プロジェクト～」、いわき教会の「チーム平・堂根」、原町教会が新たに参加し、仙台から小松神父、カリタスの担当者らで、合計17 名が参加しました。今回初参加の各教会は、次のような活動をしています。

参加者全員で！活動が続きますように！

二本松教会では風評被害で経営困難な農家の支援を、日曜日に東京、神奈川のカトリック教会へ自ら運搬・販売という形で行っています。いわき教会では仮設住宅を中心にきめ細やかな支援を行っています。原町教会は仮設へ手作りケーキの提供や刺し子教室を定期的に行っています。

会議はワークショップ形式で各グループの活動を書き出し、課題を整理しました。そこから今後の課題として出てきたことは、地域振興の必要性や集会所へ出て来られない方への支援などでした。

会議の後、南相馬市小高地区の視察と関連施設に行きました。

次回は二本松教会で 9 月 12 日（水）を予定しています。

原町ベース　池上　あけみ

CTVC カリタス原町ベース

〒975-0039　福島県南相馬市原町区青葉町 2-35
電話番号：090－6103－3422
e-mail：haramachi@tokyo.catholic.jp

ご支援宜しくお願いします。

ボランティア募集中！　ボランティア募集中！

申し込み・問い合わせ先はこちらへ
〒106－0032　東京都港区六本木４－２－３９
電話番号：０３－５４１４－５２２２
FAX 番号：０３－５４１４－０９９１

２ページからは６月１１～１３日に開催された、第２回東日本大震災仙台教区復興支援担当者全国会議の模様をお送りいたします。先ずは２コース福島の現状を瀬戸神父さまに、そして宮古ベースから南下する３コースをＳｒ．中村にレポートして頂きました。

忘れてはならない、福島のこと！

松木町教会の震災後の歩み

第２回全国担当者会議に先立って、福島県北部を視察する2コースは、6 月 11 日午後 1 時にカトリック松木町教会に集まりました。そこで抹茶とお菓子を頂戴した参加者は、松木町教会「愛の支援グループ」のふれあい茶の湯ボランティアの一部を体験することとなりました。

「わたしたちは同じ被災者なのです」とのことばを聞き、共に祈り、共に歩む教会の姿を感じました。福島の地方新聞は放射線量測定結果など詳しく掲載され、その違いに驚きます。

浪江町民が暮らす福島市にある仮設住宅

次に自分たちの家に帰ることのできない浪江町の方々の緊急仮設住宅を訪問しましたが、決して便利な場所ではありません。太陽は浜から上がって、山に沈むという「浜通り」での生活は二世代が暮らす大家族で家も大きかったのでしょう。「中通り」に強制移住させられ、板一枚で隣人と暮らさなければならない生活は大きな圧迫と不安をもたらします。それでも人々の生き甲斐を奮い立たせ、未来に向かって歩むために、浪江に戻ることを目指して、7つの仮設住宅が連合して、情報を共有しようとしておられます。「仮設住宅で生活しなければならない避難民は、わたしたちだけで十分です。わたしたちが最後の避難民であって欲しい。」と発言された仮設住宅自治会の代表の方の言葉は忘れることができません。キリスト者はキリストの十字架のうちに救いを仰ぎ見ます。最も困難な生活のうちに他者への不満ではなく、他者へと開かれている愛を示してくださったように思います。キリストの愛を教えていただいたように思えて、何度も思い返しています。

廃業の宿もある温泉地の風評被害も大きなものですが、日本人の絆を問い直しながら、ピンチの時に、この町で育てられたことを感謝し、次世代に故郷を残そうと奮闘されるホテル経営者の言葉は印象的でした。

南相馬市にある原町教会、原発から最も近い教会

翌日は、川俣町のお菓子屋さんで風評被害の実情と検査の厳しさを伺い、全村避難の飯館村を通過して南相馬市へ移動しました。津波の被害がそのまま残る場所、放射線量の高い場所、立ち入りが禁止されている地域への検問所など、原子力発電所の事故は現在進行形であることを痛感しました。

➚

➘ 原町教会がその場所からわずかに25キロメートルで、人々と寄り添うように祈り続ける場となっていることを忘れてはならないと思いました。視察の準備をしてくださった方々と出会った方々への感謝を込めて祈り続けることを約束したいと思います。

レデンプトール会　司祭　瀬戸高志

神さまの思いとは何か？

第2回全国担当者会議3コース「札幌教区宮古ベース」の視察は、宮古ベースのスタッフである和田真一氏の案内で、「河南（かなん）集会所」でのサロン活動参加から始まりました。

視察の初めは仮設住宅の訪問！　皆さんの話に耳を傾けて･･･

仮設に住んでおられる方8名ほどが、私たちを待っていてくださり、思い思いに震災時のことを話してくださいました。

私の隣に座った方は、「震災の時、5、6名で逃げていて、2名が助かり、他の方は目の前で流された。しばらく、その場所に行くことができなかった」と話してくださいました。

「助かって道路にいたら、トラックが来て、乗るように促され、山間の地区に連れていかれて、3日間その地域の方が炊き出しをしてくださり、温かいご飯をいただけた」こと。その後、仮設に入るまで、地域の方の物資援助で、自分たちで炊いて食べることができ、震災に遭わなければ知らなかった人々の温かさを実感する日々だったことなど、しんみりと語ってくださいました。

まだまだ片付かない瓦礫の山、不信感と他人事の象徴！

不自由さを受け入れ、今後の不安はありながらも、私たちを温かく迎えてくださり、多くの方の奉仕に感謝しておられる姿に、心が和みました。

その後、被災地を南下。入り江ごとの瓦礫の山また山、家の土台だけが残された平地。昨年7月、シスターズリレーで塩釜ベースにお世話になった折に見せていただいた被災地とほとんど変わりない様子に唖然としました。瓦礫の山の中で小さく見える重機での作業を目にし、気の遠くなるような現実の中で、日々の小さな積み重ねが、復旧復興につながることを信じて取り組んでおられることを思い、一日も早い実現を祈りました。

大槌の小学校、瓦礫の山が復興の遅れを物語る

帰って来てから出かけた折、ラジオのスイッチを入れると、気仙語聖書の話が流れていました。

「はじめにことばがあった」の「ことば」を「神さまの思い」と訳しておられるのを聞き、被災地に出向かせてくださった「神の思い」は何なのかと思いめぐらしながら過ごしています。

お告げのマリア修道会　Sr.中村益子

このページでは福岡教区の伊東神父さまに大槌から南三陸までの４コースの行程を長編旅行記としてレポートして頂きました。読み応え十分です。ありがとうございます。

大槌～釜石～大船渡～陸前高田～気仙沼～南三陸町！

大槌の町、白く見えるのは建物の土台のコンクリート

去る 6 月 11 日、初夏のさわやかな風のもと、再び大槌町へ降り立った。去年の夏からずっと大槌の様子を見て来たが、ずいぶん明るくなったような気がした。季節がら陽射しが明るいということもあるかも知れないが、瓦礫などがずいぶん片付けられて整理されたという感じだ。後は新しい町をどう造っていくのか？　そこにかかっているようだ。行政にも、町民にも様々な都合・意見があり、まとめていくのが難しそうだ。しかもいまだ毎日のように余震が続いている。次にいつまた大地震が来てもおかしくないような状況だ。落ち着いて未来のことを考えるのは、難しいかも知れない。なんとか一日も早く安心して暮らせる日々が来て欲しいと願わずにはいられない。

夜には、釜石ベース長・舟山神父も来られ、釜石の状況も説明してくださった。大槌も釜石も本当にわずかではあるが確かに前進しているという実感だった。

12 日朝、ミサをみなで心を一つにして捧げた。浜口司教様が司式してくださった。ベースのこのチャペルからは津波で破壊された墓地が、ちょうど正面に見える。犠牲者や被災者を思いながらミサを捧げるにはよい場所かも知れない。悲しみや悼みや胸の詰まる思いがこみ上げてくる。いつも片時も忘れることなく、この鎮魂の想いをもちたいものだ。

ベースのスタッフが作ってくださった真心たっぷりの朝食をいただいて、NGO「どんぐりウミネコ村」代表の伊藤さんとともに釜石の鵜住居（うのすまい）地区へ出発、少し空が暗くなり冷たい雨が降り始めていた。

大槌の町を望む！流されたものは自分の心の一部！

伊藤さんは、釜石と大槌にまたがる鵜住居川流域エリアの復興・町おこしを、エコや自然・伝統文化に基づいて、楽しく元気に進めていこうと奮闘されている方である。大震災の大きな苦しみに耐えながらも、すてきな夢を語られるその輝く瞳が印象的であった。

現在は、旅館「宝来館」に NGO の本部を置き、番頭をされながら NGO 活動に奔走されている。その宝来館までの道のりで、鵜住居地区の被災した幼稚園、小学校などを案内してくださった。

鵜住居地区は、地盤沈下が激しく、いまだ復興が進んでいない所だ。小学校に自動車が突っ込んだままの痛々しい風景が残っている。そしてこの幼稚園では、伊藤さんの友人の奥さんが身重のまま↗行方不明とのこと。1年以上たった今も、ご主人は探しに来られるそうだ。なんともやり切れない思いだ。

宝来館に到着。宝来館も津波に呑まれた海辺の旅館である。女将の岩崎さん自身も、津波の激流の中から生還された1人だ。本当に死ぬかと思ったそうだ。奇跡的に助かって、従業員や近所の人々と、1週間ほど旅館とその裏山で、みんなで励まし合って生き抜いたそうだ。

女将さんの話しは今後の教会へのヒント！

あの当時はまだまだ3月上旬、東北では小雪の舞うとても寒い時季だ。電気も水道もなく、どんなにひどい状況だったか、私のような者には想像もできないが、女将はとにかく助かった命だから、みんなで励まし合って頑張ったと、お話しを聞かせてくださった。そして、震災で家や家族、故郷を失った方々のため、いつでも帰ってこれるような、居場所・ふるさとの代わりになれたらいいと、旅館の復活を決意されたそうだ。

人には居場所、帰れる所は不可欠だ。この彼女の想いは、とても美しい優しさに満ちていると思う。私たちカトリック教会の活動も、このような方向性を目指すべきではないだろうか？　少し先を越された気がした。

大船渡ベース「地の森いこいの家」

宝来館でおいしいお昼をいただいて、大船渡ベースへ出発。

大船渡に着いてびっくりしたのは、その復興の早さだ。去年の夏にうかがった時には、津波に呑まれて何もかもぐちゃぐちゃ！　といったひどい状況だったが、今回来てみると、一番進んでいる所では、どこが被災した場所なのか区別がつかないほどだ。ちょっと不思議な感じがした。

この大船渡でハルノコー神父様の説明を受け、第5コースの大阪管区チームと合流、マイクロバスは満席、すし詰め状態だ。ハルノコー神父様の案内で、陸前高田、気仙沼を視察、途中、会津神父様に復興商店街を案内していただいた。

南三陸町で米川ベース長の千葉さんの活動報告を受けた。復興も進んでいるが、生活の格差や便乗商法であくどい事をする業者などもおり、新たな問題が出てきているそうだ。国の政策も遅々として進まず、かえって復興の妨げになっているとも言われていた。本当に国政をあずかる方々には真剣に頑張ってもらいたいものだ。

これで第4コースの全日程を終え、一路仙台へ。ぎゅうぎゅう詰めの満席状態ではあったが、サッカーのワールドカップ予選などの話題で盛り上がりながら仙台へ 21 時頃到着。みんなヘロヘロになりながらも遅い夕食を食べに仙台の街に消えていった。今回の視察の消化しきれていない色んな想いをみんなで分かち合った。復興支援担当者会議も2回目で、やっと形になってきたという感じだ。復興に向けて加速度的にエンジンがかかってくるのは、まだまだこれからなのかも知れない。すぐに実りを求めず、地道に忍耐して頑張りましょう。

去年も今年もかなり過酷な弾丸ツアーだった。来年はもう少し余裕のあるスケジュールだと助かります。　福岡教区　伊東成晃神父

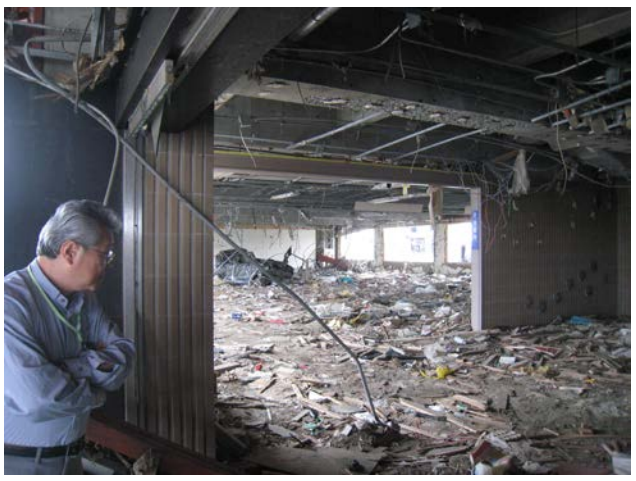
このページでは、第５コース（大船渡～仙台）の模様をカリタスジャパンのニューフェイス鈴木まりさんにレポートして頂きました。

「ともにある」教会の姿！

第５グループは、大阪教会管区が運営する大船渡ベースに午後１時に集合。地域の方が訪れるカフェ（お茶っこ）を兼ねるベースに到着すると「遠いところからようこそ。まずはゆっくりしてください」と、スタッフやボランティアの皆さんと一緒にお茶のお接待をいただきました。大船渡教会信徒でいらっしゃるお茶の先生は、ベースにも大きな協力をいただいているそうですが、津波で全て失われて唯一残った桐の箱入りの茶碗をこの日のために持ってきてくださったとのこと。こうして私たちの視察が始まりました。参加者は、高松教区の諏訪司教、大阪 ENGO の春名神父、広島教区からは原田神父と野嵜神父、大阪聖ヨゼフ宣教修道女会のシスター馬場美保、スピノラ修道女会のシスター林ゆり、そして鈴木の 7 名です。

南三陸町ボランティアセンター猪俣さんの話

はじめに、信徒として震災当日から活動され、今年の 3 月 11 日からベーススタッフとして関わられている菅原さんの体験と大船渡教会の震災後の歩みについてお話を聞きました。ご自身や、教会敷地内にある海の星幼稚園勤務のおつれあいが体験された震災当日の話、助っ人に来てくれた小さい兄弟の塩田希神父らがフィリピン出身の信徒たちを探して一軒一軒訪問し「支援物資を取りにいらっしゃい」と声をかけ、家族を置いて出にくい日曜に夫の運転で教会に来られるような配慮をされたこと、立派な家も何もかも流された一人が「今まで海からみんな恵みもらったから海に帰すんだ、いつかまた恵みをいただく、がんばろう」と話したという話、もともと元気のいい聖歌を歌う大船渡教会に、彼女たちや家族、ベースのボランティアも加わり、家庭的な雰囲気で毎月洗礼があるという話などなど、たくさん印象に残りました。

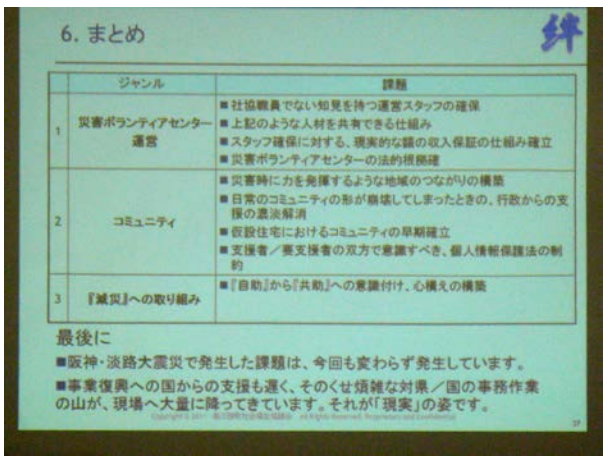

まだ片づけの始まらない陸前高田旧市庁舎

その後、ベース事務局長の深堀さんから活動視察の説明があり、グループに分かれて仮設住宅や病院訪問、仙台教区滞日外国人支援センターとお隣の陸前高田に日本の家族と暮らすフィリピン出身の信徒お二人を訪問してお話を聞くなど、それぞれの活動へ。翌日も、みなし仮設訪問（行ってみたら「おさかなセンター」へのお買い物など皆さん外出中のため、急きょ支援物資整理のお手伝いに）や、ベーススタッフのシスター野上に同行して地ノ森仮設住宅のお宅訪問など、ベースの活動に触れながら、被災された方たちの中でも徐々に見られる格差の拡がりなどを知る機会となりました。 ↗

↘ 私たちが出たり入ったりする合間にも訪問者がひっきりなしに訪れる大船渡ベースに、宮古と大槌から移動してきた第 3･第 4 グループも合流。改めてハルノコー神父から大船渡ベースの活動について説明を聞き、ハルノコー神父の突然？の振りで、春名神父による落語「動物園」の一席！「今日はなんだか、神父さんやシスター方がえろう来てはりますなあ」枕から最後のオチまで笑わせてもらいました。感謝！

市庁舎内の献花台。 未だ花は絶えることがない！

午後にはマイクロバスや乗用車に分乗し、大船渡から陸前高田、気仙沼、南三陸を経て仙台へ。陸前高田では旧市役所本庁舎に立ち寄って祈りを捧げ、気仙沼ではカリタスの支援を受けた南町紫市場の仮設商店街を訪問、青年会副会長でお子さんがカトリック幼稚園に通っているという小野寺さんから立ち上げ当初のお話をうかがい、皆で商店街を視察（揚げたてコロッケをほおばったり、気仙沼産「蔵の華」使用の純米吟醸酒を求めたり）。会長の坂本さんや気仙沼教会の会津神父も駆けつけてくださいました。



猪俣さんのまとめのスライド

南三陸町災害ボランティアセンターでは、米川ベースの千葉さんの出迎えを受けて、センター所長も兼ねる南三陸町社会福祉協議会の猪俣さんのお話を皆でうかがいました。町職員だった奥様は震災から行方不明のままとおっしゃる猪俣さんからは、ボランティアの数でなく 1 人が瓦礫を 1 つ片付ける、片付くと前に進めることが大事であること、でも 2,100 の仮設住宅世帯ではアルコール中毒が増えているという話もあり、仮設から復興住宅に全員移れるまでには 10 年かかるだろう、今は一日何回笑えたか、楽しい思いをしたかが大切であること、そして復興計画や公的支援の課題など様々なお話をいただきました。

自治体の復興計画や復興ビジョンは示されたものの、詳細はまだこれからで今後長い歩みとなります。大船渡では、ベースと教会と神父様やシスター方の共同体という三者の連携の有り様を見せていただき、今後も被災された地域の方々のニーズに合わせて大きくなったり小さくなったり、形を変えながら「ともにある」教会の姿を見た気がしました。

気仙沼南町商店街で小野寺さんの話を聞く！

カリタスジャパン事務局　鈴木まり

大船渡ベースでも、米川ベースでもボランティア

大募集中！　詳細は「カリタスジャパンブログ」で！

全国担当者会議最終日のプログラムはシンポジウムとミサでした。このページではシンポジウムの概略と、シンポジウム第 2 部の主な意見を掲載します。

「これからどうあるべきか」を再確認！

今回のシンポジウムは二部構成で行われました。第一部は「昨年蒔かれた種が様々な場所で芽を出している」成果として、現場担当者と、後方支援に関わる方々からお話をいただきました。このように各方面から被災地を支えてくださった方々のお話を一度に聴くと、改めてこの一年三ヶ月の出来事や場面が鮮明に思い出されます。「あの時からあのベースができたんだ」「あそこではあんな事をやっていたんだ」「シスターズリレーで来て下さったシスターたちは元気だろうか」等々。こんなにも多くの方々の支えによって、今我々はここに立っていることに心からの感謝をおぼえました。

そしてなにより、現場のスタッフも後方支援して下さる方々も、誰もが次を、明日を見据えて活動しておられます。この発表は「これまでどうだったか」を振り返ると同時に「これからどうあるべきか」を再確認する場でもありました。スタッフの現状、被災地の復興状況、ボランティアの動向など、それぞれの立場で持っている情報、抱えている問題意識を共有したことは非常に意味のあることだったのではないでしょうか。

第二部はさらに焦点を絞り、福島県について話が進められました。福島が抱える不安とはいろいろな意味で「見えないこと」の不安だと思います。放射能自体が目に見えないだけではなく、いつ家に帰れるか、いつまで避難しなければならないのかといった先のことも「見えない」。 そんな福島の方々に末永く寄り添っていこうという想いを持っている各団体の方々の決意が非常に頼もしく感じられました。

最後に、参加して下さった全ての司教様、神父様の共同司式によるミサで三日間の幕が閉じました。大聖堂いっぱいの全国からの参加者の姿に、「主において私たちは一つ」であることを心から実感させられました。本当にありがとうございました。

SDSC　赤井悠蔵

シンポジウム第２部から

カトリック原町教会での司牧活動を通して――梅津明生神父

原町教会は南相馬市にあり、福島原発事故以降、市内の様子は激変しました。市民もそうですが、教会の信徒は、一時 10 人くらいになりました。しかし、今は徐々に地元に戻ってきて、現在は 44 人います。避難している信徒は 20 人。他の小教区に転出した信徒は 2 人です。

昨年から「絆」という言葉がよく使われるようになりましたが、この言葉は大変美しいのですが、実行は大変難しいと感じています。それは、信徒一人ひとりの放射能についての受け止め方がそれぞれ異なっているからです。

私は、今は、そのような信徒一人ひとりの心を受け止める時ではないかと思っています。イエス・キリストは、「インマヌエル・私たちと共におられる神」です。このイエスに倣う教会でありたいと思います。

「白河みみずく」の活動から見えること――金澤弘子

シンポジウムに先立って挨拶する菊地司教さま

私たちの活動から福島の現状を申し上げるならば、「六重苦を背負わされている」といえると思います。

その六重苦とは、大震災、大津波、原発事故、風評被害、差別、当事者の嘘、の6つです。当事者の嘘ということは、政府、東電、関係機関が、うそ、ごまかし、逃げ、隠し事をしているということで、このことが、最も被害者の心を苦しめ、希望を失わせるものです。↗

↘ 問題点として見えてきたことは、放射能についての感じ方が家族の間でも違い、そのために、家族関係がギクシャクしたり、分裂、分断ということがみられます。これは、大きな問題だと感じています。賠償金をもらうことにエネルギーが注がれ、これからどう生きるのかということに、心が向いていません。日本社会の人々がフクシマを忘れることなく、私たちが原発事故から学び、回心による真に新しい生き方をし、この闇と混乱の中で、「光」「塩」でありたいと思っています。

二本松で農家の方々と関わって――柳沼千賀子

原発事故でフクシマの農家の人々は、土地を台無しにされました。しかし、土地を捨てて県外に逃げることもできず、何とか農業復興のために奮闘なさっていますが、作物の販売は、困難を極めています。

放射能測定所が県内各所に設けられ、毎日、測定されていますが、放射線量は「空中、土壌、作物」では別の値を示すことがあります。例えば、土壌にセシウムがあったとしても、必ずしもその作物は、セシウムを吸い上げるわけではなく、ND（不検出）という結果が出ることが多いのです。

農家の方は、それで、野菜などが販売できるかといえば、そうではありません。現実には、買ってくださらない方が多いのです。この結果に、農家の方々は暗い顔をなさっています。

第 1 部のシンポジスト

そこで私たち二本松教会の信徒たちで、「福島やさい畑～復興プロジェクト～」を立ち上げ、主に首都圏のカトリック教会にご協力をいただき、安全確認のできた福島の野菜、果物などを販売しています。これを私たちは、事業としてやっています。それは、福島復興のために、県内で仕事ができることが重要課題であり、自活の道を開いていくことが最優先課題であると考えているからです。

いわきサポートステーション「もみの木」から――丹　弘

「もみの木」がある、いわき市中央台高久地区には、大きな仮設住宅団地があります。

そのほとんどは、原発事故により避難してきた広野町と楢葉町の人々が住んでいる仮設住宅団地です。避難期間が1年を超え、自立に前向きな人と、最初からあきらめている高齢者などがおられます。さらに、東電から見舞金をもらい働く意欲をなくした人、見舞金をもらっても働く場所がなくてパチンコやお酒に走ってしまう人がいます。このような問題が見えてきても、どう対処すべきか具体策が見えてきません。

第 2 部のシンポジスト

この現状が知らされていない全国の人々に、最前線で活動している私たちだからこそ、発信できるものがあります。私たちが目で見、聴き、感じたことを伝えていきたいと思っています。

復興活動の今後の方向性――漆原比呂志

福島県民へのアンケートによれば、今、福島で必要とされているものは、「除洗」「食の安全」「子どもたちの遊び場」が上位3位を占めています。このニーズは、すべて放射能に起因しているものです。

被災者・避難者のニーズに応えるためには、「支援システムの構築」が重要だと考えています。

そのためには、①地域の地道梨園活動が出発点。――これは、地域の教会が、地域の被災者・避難者を支援している活動に協力していく必要性。
②力を結集させる。――県外の支援グループと連携し、支援を継続していく。
③連帯を通して支援を拡充する。――連帯を促進していく。
④福島の問題を福島だけの問題にせず、世界に発信していく。
以上の4つのポイントが重要ではないかと思っています。